



カイツブリ

水上の浮き巣で子育てをする水鳥

ため池や流れの緩やかな川などで、スツと水に潜ったかと思うと、違う場所からひょっこり現れる鳥を見かけたことはないでしょうか。

カイツブリ(カイツブリ科)という全長26cmほどの小型の水鳥で、日本には湖沼や川などに近い仲間が5種、生息しています。

水の上を生活の場とするカイツブリは、巣も水上に作り、初夏、ヨシやマコモなどの茎を柱に、葉や水草を積み上げます。見えている部分が3~5cmという薄さに対し、水中には厚さ50~60cmもの円錐状の土台におが隠れており、浮いているように見えることから「鳩の浮き巣」という季語にもなっています。

卵を産む産座は水面ギリギリにあり、水草などが腐ったり、反対に初夏の日射しで干からびたりするため、親鳥は水草をこまめに敷きなおして、巣を清潔に保ちます。



▲ 巣の断面イメージ



▲ 巣の上の親鳥。葉や水草を積み上げて水に浮いているような巣を作る。

「氷山の一角」のように、水面下には50~60cmの大きな土台部分が隠れており、浮き巣といっても水底まで届いているものもある。中には朽ちた茎や葉が詰まっている。



▲ 卵を守る親鳥。天敵から隠すための水草や葉をあらかじめ準備している。

また、巣を離れる時にはワシ・タカ類やカラスなど空から迫る天敵に見つからないよう、用意しておいた水草で卵を隠します。この行動は卵を冷やさないための知恵だとも言われています。

オスとメスが交代で温め続けて約20日、小さな卵からヒナが誕生します。カイツブリのヒナは早くから泳ぐことができますが、疲れると親鳥の背中に乗せてもらいます。ヒナを背中に乗せて泳ぐ珍しい子育てです。親鳥は、ヒナが背に上りやすいよう助けたり、食べ物を食べやすい大きさにしたりと細やかに世話をしつづけ、他の生き物が巣に近づけば、自分の倍以上あるようなカモにも果敢に立ち向かいヒナを危険から守ります。

水鳥の子育てを目にすることは普段なかなかできませんが、豊かな自然の中で、様々な生き物たちに囲まれながら巣と命を守る動物は、常に備えることを忘れません。

起きてはほしくない万が一の時、私たちが忘れてしまっている「備える」という大切なことを、もう一度考えてみる機会にしてください。